

誰が救われる？

丸山 勉

[聖書] マルコによる福音書 10章17節～27節

イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもない。『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。イエスは弟子たちを見回して言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」弟子たちはこの言葉を聞いて驚いた。イエスは更に言葉を続けられた。「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」弟子たちはますます驚いて、「それでは、だれが救われるのだろうか」と互いに言った。イエスは彼らを見つめて言われた。「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」

[序] 単に教訓的な物語なのか

聖書の小見出しでは「金持ちの男」とタイトルが付いている箇所から、神様からの語りかけをご一緒に聞いて行きたいと思います。この物語は皆さんも何度も読まれたり、色々な牧師先生の説教を聞いてこられた方が多いのではないのでしょうか。

ただ、どちらかと言うと、この物語の男の人は「ちょっと残念な人」というような捉え方が多かったのではないのでしょうか？確かにそういう一面はあると思います。同じ金持ちでも、あのザアカイのように、イエス様と出会って本当に喜びに満たされた話であればスッキリするのですけれども、どうもこの男の人は、せっかくイエス様と出会っても「悲しみながら立ち去った」訳ですから、そうならないようにという、教訓的な話として受け止めてしまいがちです。

けれども私は、改めて今日の説教の準備でこの物語を何度も読み、味わい直してみた時に、これは単に「イエス様との出会いのチャンスを無駄にするな」という話ではなく、神様ご自身の大きな憐れみが隠されている物語のように思いました。それを分ち合わせて頂ければ幸いです。

[1] この男の問い

この物語は、三つの福音書に共通して記されています。但しそれぞれの福音書で、微妙に違いがあります。マタイ福音書19章では、この男の人が「金持ちの青年」となっていますし、ルカ福音書18章では「金持ちの議員」となっています。まだ年も若い、しかし社会的地位もある裕福な人物ということなのではないでしょうか。どのような人を想像できるでしょうか？今だったら、IT企業の若手実業家か、どこかの政党の世襲の若手議員でしょうか。

けれども、その男の人が、自分からイエス様を訪ねてきたのです。しかも、走りよって。そして跪いてイエス様に言いました。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」——私は、何かこの男の人の姿勢に、少し慙懃無礼なものを感じてしまうのです。跪きながら、自分も「先生」などと言われている立場

だからなのか、イエス様に対しても「善い先生！」と言って近づくその姿勢に、ちょっとパフォーマンス的な感じを受けてしまうのは、私だけでしょうか？

けれども、この男の人が尋ねた内容は、実に深いものでした。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」彼がイエス様に問うたのは、「永遠の命」についてでした。私はハッと思いました。果たして、私たちはこの男ほどに「永遠の命」を切に求めているだろうか。キリスト教信仰に生きている私たちも、もしかしたら、イエス様の言葉を、この世を生きる上での安っぽい慰めや、何か処世訓のようにだけ聞いていないだろうか、と。

聖書というのは、私たちに「まことの命」、すなわち「救い」を指し示すものであると、少なくともこの男の人は受け止めながら、聖書(当時は旧約聖書ですが)に接していたに違いありません。神様がモーセを通して示して下さった律法の教えに生きることを何より大切なこととして生きてきた真面目で熱心な人だったようです。

けれども、「永遠の命」の確信が自分にはない。彼の中には「死」を超える希望がなかったのです。旧約聖書の信仰を持っていながらも、です。彼がこれまで出会った律法学者たちは、「永遠の命」やその幸いを教えることはなかったと言っているのでしょうか。

[2] 旧約聖書と「永遠の命」

「永遠の命」、それは旧約聖書では明らかになっていないものなのですね。私は最近出された『旧約聖書神学用語辞典』(W・ブルグゲマン著)を見てみたのですが、そこには「永遠の命」の項目はありませんでした。けれども、「死」という項目はあります。その中でこのようなことが書かれていました。

「究極的にイスラエルは、その歩みを、生命の神であるヤーウエ(YHWH)に委ねており、死の力がヤーウエの真実において与えられた幸いを無にすることなど出来ないという確信を持っている。旧約聖書は、そのほとんどの箇所、死を超えてその先にある生について憶測を持つことに対しては躊躇してきた」。

そしてさらにこう書いています。「(旧約では)個人的にせよ、共同体にせよ、死に対処し、死の意味を理解するための方策を持ってはいない。」

わずかに旧約聖書では「詩編」の言葉の中に、「永遠の命」を思わせる信仰が現されているところがあります。例えば詩編56:14に、「あなたは死からわたしの魂を救い、突き落とされようとしたわたしの足を救い、命の光の中に、神の御前を歩かせてくださいます」とか、詩編23:4の、「死の影の谷を行くときもわたしは災いを恐れない」といった告白です。けれども、殆どのところでは、「永遠の命」については沈黙しています。

ですから、この金持ちの男が、旧約聖書に熱心であればあるほど、また、自分という存在は一体どうなってしまうのだろう？という実存的な問いを持てば持つほど、「永遠の命」についての問いは真剣なものであったように思うのです。

[3] 自分の思いを捨てること

この男の人は千載一遇のチャンスとばかりに主イエス様に近づき、永遠の命をどうすれば受け継ぐことが出来るのかと問いました。その後のやり取りは聖書に記している通りです。イエス様は、10章21節で「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」と言われ、それに対して彼は「悲しみながら立ち去って」しまいました。

その後でイエス様は「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。…金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」と弟子たちに言われたとあります。こういう所を見ると、ああ、結局清貧に生きなければ、神様は神の国に簡単には入れて下さらないのだな、金の誘惑というのは恐ろしいものなのだ、と捉えてしまいがちです。

しかし、では、お金持ちの人は救われないのか？ そんなことはないと思います。もしそうであれば、救いの条件というものが、結構生まれつきの境遇で決まってしまうことになりかねません。

この物語で注目したい言葉は、「売り払う」という言葉です。「手離す」と言い換えても良いかもしれませんが。イエス様は、私たちが神様の「救い」を頂くという時には、「売り払う」、つまり手離さなければならないものがあると仰っているのではないのでしょうか？

それは何でしょうか。私は、それは「自分の思い」ではないかと思えます。この金持ちの男で言えば、「何をすれば良いのでしょうか」という、更に自分の熱心さを積み上げて行こうとする、自己拡大と言いますか、自己実現の思いではないのでしょうか。「その延長線上には“神の国”も“永遠の命”もないことに気づいて欲しい、そうではなく、そのような思いをすべて“売り払い”なさい。その時あなたは自由になるよ」と、主はそうおっしゃりたいのではないのでしょうか。

そして、それと対比するものもここには記されています。それは「私に従いなさい」と言われるイエス様のお招きです。「私に従いなさい」というこのイエス様の招きは、実はこの箇所少し前の重要な場面でも語られています。マルコ福音書8章31節以下の、第一回目のイエス様の受難と復活の予告の中です。

「それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」それから、群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言われた。「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があるのか。」

ここではペトロが叱責されています。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」。そうです、人間の罪というものは、とどのつまり、こういうことなのではないのでしょうか。この時のペトロも悪気はないのです。「あなたのような善きお方が死ぬなどということがあってはなりません。わたしはあなたをお守りします」という気持ちだったのでしょう。

しかし、それは神様のご計画が見えず、これから十字架への道を歩まれる決意をされたイエス様をとどめる言葉となってしまいました。それはイエス様からすると、神様の計画に反逆するサタンの業なのです。

ペトロよ、あなたがわたしを守るのではない、わたしがあなたを守って、愛して、あなたの身代わりとなって十字架に付くのだ。「自分の思い」を捨てて、わたしの思いを受け止めて欲しい、そうイエス様は思われたのだと思います。ですから私たちは、自分の熱心さで従うではありません。イエス様を本当に知る時に、私たちは、努力によってではなく、自然に自分の今までの拘(こだわり)を捨てる事が出来るようになるのですね。これこ

そ、聖霊のお働きだと思います。

[4] 「永遠の命」のスタートラインに

人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。」(マルコ8:36)と主は言われました。そうです、いくら財産があっても人は最後には死んで行きます。この金持ちの男もそのような人生の空しさをどこかで感じていて、それでイエス様に近づいたのかもしれませんが。イエス様と私たちとの出会いは百人いれば百人違います。けれどもきっとイエス様は、私たちの心の一番奥深くに触れて来られる方だと思います。誰にも見せることのない私たちの秘密の場所に。なぜなら、そここそが、「永遠の命」のスタートラインになるからです。

例えばあのサマリアの女には「あなたの夫を連れてきなさい」と言われ、またこの金持ちの男と同じように「何をしたら永遠の命を受け継ぐことが出来るでしょうか」と問うた律法の教師には「善いサマリア人のたとえ」を語られ、「あなたも行って同じようにしなさい」と、その人の最大の課題に切り込んでこられるのです。でも、それはそれは一人ひとりに相応しく、「救い」への正しいスタートラインに立たせてくれるためです。あの金持ちの男をも、そこへと立たせて下さったのです。

皆そうではないでしょうか？ 私自身も、振り返ると本当にそうでした。神様との関わりを締め出して、「自分」の思いで生きてきた人生。けれどもその内実はいつも空しさでした。神様・イエス様と出会って、それまで自分は死んでいたなと思いました。崖をめがけて「自分」という列車を運転していたなと思いました。イエス様と出会って、「向き」が違っていただけに気づかされました。この「向き」が大事です。その「向き」さえ間違わなければ安心なのです！

イエス様は、全ての人を救いに招いて下さっています。これは疑う余地はありません。イエス様はここでおっしゃったのではないですか。27 節で、「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」と。では、神様に出来ること、イエス様に出来たこととは何でしょうか？ 先ほど、イエス様の第一回目の受難と復活の予告の部分を読みましたが、今日の物語のすぐ後でも第三回目のそれが記されているのです(マルコ 10:32~35)。

イエス様が、私たちの身代わりとなって死んでくださったこと、そして、私たちに「永遠の命」を確かにするために復活してくださったこと、これこそが、「神には何でも出来る」というその内実なのではないでしょうか！

[結] 主の慈しみの眼差し

「だれが救われるのだろうか」、この弟子たちの問いを私たちはもうする必要はありません。「主の御名を呼び求める者は誰でも救われる」とパウロがローマ書10:13に書いてある通りです。幼な子の心になって、「神様、イエス様、この不信仰な者を憐れんで下さい」と祈れる者は、既にイエス様の救いに中に入れられています。なぜなら、救いとは、イエス様と繋がることそれ自体だからです。

思い起こして下さい。あのゴルゴタの丘で、イエス様と一緒に十字架につけられた強盗を(ルカ23章)。その死刑になった強盗がイエス様に、「イエスよ、あなたが御国においてになる時にはわたしを思い出して下さい」と言った時に、「今日、あなたは私と共にパラダイスにいるのだ」と、神の国を、それこそ、「永遠の命」を約束して下さいたのです。彼は自分で自分を救うことを諦め、心の底から、主イエス様にお委ねしたのです。その時のイエス様の眼差しは、茨の冠が刺さった頭から血が流れていたでしょうけれども、きっと、あの金持ちの男を慈しんで見つめられたのと同じように、愛に溢れた眼差しで見つめられていたのではないかと思います。そしてそれは、今、私たち一人ひとりにも注がれている眼差しです！

これが、私たちの信じる**神様**です。今、私たちが神様との関係をさえぎるものが示されたのなら、それを捨てさせて頂いて、身軽になって、ご一緒に「**神の国**」への**途上の生**を、全て主にお委ねして生きてゆきたいと願う者です。

イエス様ご自身がこのように語っておられます。「**永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです**」(ヨハネ福音書の17:3)

お祈り致します。

主よ、あなたは真実なお方です。「神にはできる。神は何でもできるからだ」と おっしゃり、私たちを救うために、十字架への道を自ら歩み、私たちの罪を負って死んで下さって、三日目によみがえって下さいました。それは、あなたの、わたしたち一人ひとりを救う深いご計画の成就でした。心から感謝致します。

教会暦ではこの前の水曜日から、レント、受難節の時に入りました。どうか、み言葉の光に照らされて、私たちに自分の罪を深く探らせて下さい。そしていつも あなたに向かって大胆に罪を告白し、大胆にあなたの救いを喜び、受け取る者とさせて下さい。あなたの救いが、この世界を覆いますようにと祈ります。

今、特に、試練や病の中にある、愛する者たちを御目に留めてください。私たちをいつも祈りの共同体として歩ませてください。

十字架と復活の主の御名によってお祈りいたします。 アーメン。